

※立川教会では、以下のようにクリスマスをお祝いいたします。
どうぞ、どなたでもお出で下さい。

☆クリスマス礼拝
12月22日(日) 午前10時30分～
☆クリスマスイブ燭火礼拝
12月24日(火) 午後7時～

12月第3週の礼拝説教

- 日 時：2024年12月15日(日) 10:30～11:30 待降節第3主日礼拝
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：フィリピの信徒への手紙4章4～9節(新約P366)
- 説教題：「すぐ近くにおられる主」
- 讃美歌：19(み栄え告げる歌は)
241(来たりたまえ われらの主よ)

本日は、待降節の第3主日になりました。日本基督教団の聖書日課では、福音書からはマタイによる福音書11章2節から19節が選ばれており、その箇所の内容は洗礼者ヨハネが主イエス・キリストの先駆者として行動したために捕らえられており、牢の中から主イエス・キリストのなされたことを自分の弟子たちに尋ねさせているという場面から書き出されています。それに続いて、主イエスがヨハネの働きについて、旧約聖書の預言から『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』と書いてあるのは、この人のことだ。」と群衆に向かってお語りになったことが記されています。主イエス・キリストのご降誕を覚える待降節の時期に、主イエスの先駆けとして働いた洗礼者ヨハネのことについても覚えておきましょう、という意図があって選ばれている箇所なのでしょう。しかし、本日は新約聖書から選ばれているもう1箇所の聖書箇所であるフィリピの信徒への手紙4章4節から9節を取り上げたいと思います。

フィリピの信徒への手紙は、よく「喜びの手紙」と呼ばれることがあります。その理由が本日の聖書箇所の4章4節にあるのです。フィリピの信徒への手紙の著者パウロは、この手紙を記した頃には、投獄されて獄中にあっただと言われていました。しかし、そのような状況の中でも、「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」と、彼はこの手紙を読む人々に勧めているのです。その勧めは、いつの時代にあっても多くの人々の心を動かし続けてきました。そして、この礼拝をささげている私たちのところまで届いているのです。けれども、私たちは「そうは言われても、すぐに、『はい、喜ぶます』というわけにはいかない。自分自身の周囲を見渡しても、喜べる状況はあまり見当たらない。この年末に社会全体もあまり先が見えないし、世界も混迷を深めているの

に、どうしたら喜ぶことができるのか。」と誤ってしまいます。さらに、「喜んで生きなさい。」などと勧めるならば、どうしたらそのようなことができるのか教えてほしい、というのが私たちの切実な問いかもしれません。

けれども、その喜びが神さまによって、神さまを信じる場所に与えられる、と使徒パウロは語っているのです。私たちが、自分自身を無理やり駆り立てて、作り笑いをしながら喜んでいるように振る舞うということではないのです。4節では、「主において常に喜びなさい」と語りかけています。フィリピの信徒への手紙では、「主において」、「キリスト・イエスによって」「キリスト・イエスに結ばれて」という表現が何度か重ねて用いられています。それらの「において」「によって」「に結ばれて」という言葉は、英語で言えば「in」という前置詞です。使徒パウロがフィリピの信徒の手紙をはじめとして他の手紙においても、好んで用いている表現です。主なる神様を、またその独り子なるキリスト・イエスを信じることによって、彼自身が生かされていることをたった一つの言葉によって明らかにしているのです。ですから、4節の「主において常に喜びなさい」とは、主なる神様を信じることによって、その喜びに生きなさいと語っているのです。その喜びの勧めの根拠として、4章の5節の後半に「主はすぐ近くにおられます」と記されています。一般的には、ここでの「主はすぐ近くにおられます」というのは、使徒パウロが再臨の主イエスの到来が近いと語っている、と解釈されています。主がすぐ近くに来ておられるのだから、その主にあって「常に喜びなさい」と言われているのです。主なる神様が、はるかかなたの天の上におられるのではなく、私たちのすぐ近くに来て下さっているというのです。獄中に捕らわれて不自由な日々を送ることを余儀なくされているのに、使徒パウロは、神の独り子である主イエス・キリストが、まことの人間となってこの地上を歩いて下さり、人々と共に生きて下さり、そして十字架にかかって死んで下さったという具体的な出来事を覚えています。ですから、確信をもって、その主が「すぐ近くに」再臨して「おられます」と仲間たちを励まし、また、今の時代の私たちをも励ましているのです。

12月のこの時期になると、ヘンデルの「メサイア」の演奏会が良く開かれます。その16曲目のソプラノの Aria を、昨晚思い出しました。「Rejoice Rejoice Rejoice」と歌い出されています。旧約聖書のゼカリヤ書9章9節,10節の

「9 娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る

雌ろばの子であるろばに乗って。

10 わたしはエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
諸国の民に平和が告げられる。
彼の支配は海から海へ
大河から地の果てにまで及ぶ。」

から、歌詞が作られています。

その歌声を聴きながら、6節の御言葉「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」。を読みますと、私たちが社会や世界の閉塞状況に重苦しさを覚えている現実から、どのようにして抜け出すことができるかが示されているように思いました。この勧めは、つらいこと、苦しいこと、悲しいことなどの全てを、自分一人で自分の心の中だけであれこれ思い巡らしていないで、神さまにそれを打ち明けなさい、ということです。神さまは独り子イエス・キリストによって私たちの近くにおいて下さるので、私たちは、どんなことでも、神に祈り、願い、求めているものを打ち明けることができます。なぜなら、神の独り子である主イエス・キリストが、人間になってこの世を生きて下さっただけでなく、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さり、復活して下さったからです。そして、私たちはその主イエスが、必ず再臨してくださるという望みに生かされているからです。7節では「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」という慰めと平和が与えられることが記されており、そこには、「あらゆる人知を超える」、つまり人間の力では決して得ることのできない真実の喜びがあることが語られています。それは私たちがすべてのことにおいて順調に歩めるといような喜びではありません。むしろ、思い煩いながら歩んでいるような弱さの中でこそ、私たちを支え守ってくださる真実の喜びなのです。そして、その喜びと平和は、ゼカリヤ書で歌われているように、主なる王がやって来られて、戦車や軍馬や戦いの弓を絶たれ、諸国の民に平和が告げられるというような、地の果てに及ぶようなものでもであると聖書は語っているのです。まさに今の時代にこそ、必要な究極の平和と言えるでしょう。

8節には「すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい」とあります。ここに並べられていることは全て、この社会を、そしてこの世界を、より良くしていくために役立つものであり、人と人々が愛し合い、支え合って生きる関係を築くために役立つものでもあります。私は、このフィリピの信徒への手紙の4章8節の「すべて真実なこと」という言葉に、神学校を卒業して最初に勤めた女子大で出会いました。その女子大の正門に入って正面を見ると、歴史のあ

る「本館」と呼ばれている建物の壁面に、ラテン語で「*quaecumque sunt vera*」（すべて真実なこと）と刻まれていたのです。それを心に留めて学生生活を送り、生涯にわたって歩み続けなさい、ということだと思えます。

使徒パウロは、それらの勧めの最後に 9 節で「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。」と語っています。このような勧めを私たちの周囲の人が語りかけて来たなら、それがたとえ自分の先生の言葉であっても、私たちはあまり良い印象をもって受け取ることができない、というのが本音だと思います。なんとなく、上から目線で教えられていると受け取ってしまうからです。しかし、獄中にあるパウロは、いつ処刑されるかわからないという場面で、これまで自分自身が生きてきたことのすべてをあなたがたに知ってほしい、そのように生きてほしい、と勧めているのです。フィリピの信徒への手紙 1 章 21 節に、「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」という御言葉があります。使徒パウロはそのように生きているがゆえに、また、そのように生かされているがゆえに、「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。」と語ることができたのだと思えます。私の師である牧師もまた、人から署名を頼まれたりすると、いつでも「我にとりて、生きるはキリスト」とお書きになりました。おそらくそのように生きておられたのだと思えます。9 節の後半には「そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。」と語られています。この御言葉から、待降節を過ごしている私たちは、『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」というマタイによる福音書 1 章 23 節の御言葉を思い浮かべるのではないのでしょうか。すぐ近くにおられ、私たちと共におられる主イエス・キリストのご降誕を心から待ち望みたいと思えます。